松浦ケントの大爆走　東京、大連、瀋陽、MHK

matsuura

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
松浦ケントの大爆走　東京、大連、瀋陽、ＭＨＫ

【Ｎコード】
Ｎ０７６３Ｖ

【作者名】
ｍａｔｓｕｕｒａ

【あらすじ】
私立探偵松浦ケントは、ミスター・ロンから行方不明のチェン部長の調査以来を受けた。
キュウ先生のプログラムを解くために、ケントは、東京⇒大連⇒瀋陽⇒ＭＨＫを爆走。
チェン部長失踪の真相を突き止める。
しかし、全ての真相は春にならなければ明らかにならなかった。

２０１１０７０２　ｄＮｏＶｅＬｓ　投稿

（前書き）

私立探偵・松浦ケントが、中国で初めて仕事を受ける。そして、大陸を爆走する。

1.

久しぶりに、私、私立探偵松浦ケントは、日本橋・浜町の事務所で満ち足りた日々を過ごしていた。

昔、私が青春時代の一時を暮らした思い出の町だ。

ジュリー、マドンナと夢のような楽しい生活を過ごした。独り者にとって生活し易い町だ。

コインランドリーもある。

この界隈には、自称美食家の私を満足させてくれる和食店や洋食店がたくさんある。

そのなかでも、「銀寿司」が、私の一番のお気に入りだった。

今日の夕食も、「銀寿司」へ行こうかと考えていた。

その時、ＶＩＰ依頼人専用の携帯電話が激しく鳴った。

大連のミスター・ロンからの電話だった。

彼は、中国飲食業界では超大物だ。

年商１０００億円を売り上げる日本料理チェーンの「七夕グループ」のワンマンオーナーだった。

店舗数は、５６８軒。香港からハルピンまで到る所に店舗がある。

寿司、割烹料理、日本式ラーメン、焼肉、牛丼、定食店等料理の種類も豊富だ。

特に、海鮮料理部門には力を入れている。

山東省出身の彼の店舗管理能力は、当に天才的だ。

彼は、一人で大連開発区の金帆ホテルのインペリアルスイートに住んでいる。

彼は、妻と別居中だ。

たぶん、子供ができないのが原因のようだ。

金帆ホテル内には「七夕グループ」の総本部もある。

自称美食家の私が、以前、ミスター・ロンに日本食の作り方を教

えてやったのがきっかけで付き合うようになった。
「ミスター・ロン、久しぶり、お父さんは元気か」
「ありがとう」
「しかし、親父の中風はひどくなるばかりだ」
「それに、親父は相変わらず訳の判らないことばかり言っている」
「最近、仕事のほうはどうだ、ケント」
「忙しいか」
「おれは相変わらず、暇(ひま)してるよ」
「おまえに相談に乗って欲しいことがある。親父もおまえに会いたがっている。大連に来ないか」
「今、大連のヒラメを食べたいなと思っていたところだ」
日本のヒラメも美味しいが、私は、大連のヒラメは超美味だと思っている。丸揚げにしても、刺身でも美味しい。
「了解、至急、格安チケットを手配して、大連に行くよ」
「じゃ、大連で会おう（大連見）」
私は、インターネットで格安チケットを探し、発券を依頼した。

2.

それから三日後の夕方、私は大連空港にいた。
タクシーを捜しに到着ロビーを出ると、柄の悪い客引きが私のそばに寄ってきた。
その客引きにはかまわず私は、まっすぐタクシー乗り場に向かった。
年々、大連のタクシー運転手の質が落ちているように感じる。
大連空港から開発区まで、タクシーで約一時間掛かった。
前回、大連に来たときに比べて、自動車が異常な速度で増えているようだ。
それも、日本に比べて高級車が格段に多いのには驚いた。
私は、開発区の金帆ホテルのロビーのソファーに座って、雑誌を見ながらミスター・ロンを待っていた。

１０分ほどすると、大柄でメガネをかけた色白のミスター・ロンが出て来た。
「ケント、よく来てくれた」
「おまえの部屋も、このホテルに用意してある」
「おまえの荷物はここに置いておけばいい」
「後で、おまえの部屋に荷物を運ばせておくから」
「いつも、ありがとう」と言った。
私たちは、ミスター・ロンの経営する金帆ホテルの一階にある「割烹七夕レストラン」へ行った。
レストランの面積は１０００?、従業員が４８名。和食と鉄板焼きがメインで、いつも満席だった。
私たちは、個室に案内された。
海胆、舌平目、つぶ貝の刺身。鮑の煮物。アナゴと海老、竹の子の天麩羅。焼きタラバガニと和牛の鉄板焼き等の料理が出て来た。
酒は、「長城」ワインの白だ。
最近の中国のワインは美味しい。
私は「長城」ワインが好きだ。
私が、このレストランへ来るといつも挨拶に出てくる経理財務担当重役のチェン部長の姿が見えなかった。
チェン部長は、「七夕グループ」全体の経理財務を見ていた。ミスター・ロンの最も信頼する部下であった。
「経理部長のチェンさんは休みですか」と、私は尋ねた。
ミスター・ロンが煙草を一服して話し出した。
「去年の９月末に、売上金横領の報告が上がって来た」
「それで、外部のＭＡＣという専門機関に依頼して極秘にグループ内の売上金横領の調査をしたんだ」
「調査の結果、売上金横領は無かった」
「しかし、偽装小切手が振り出されていた」
「その偽装小切手を振り出した犯人は捕まったのですか」
「厳密に言うと、小切手自体は本物なのだ」

「なぜなら、経理財務担当のチェンが振り出した小切手だから」
「銀行へ連絡したのか」
「もう、銀行へは手を打った」
「損害は幾らだ」
「損害は、１０億円だ」
「一億円の小切手１０枚だ」
「この七夕グループの仕入れのほとんどはキャッシュ払いで、七夕グループの経営内容も良いから、町の金融機関は喜んで買い取ってくれる」
「そのとおり、七夕グループは優良企業だから、お宅の小切手はどこでも買ってくれる」
「そして、チェンは、町の１０社の金融機関へ一億円の小切手を一枚ずつ持ち込んでいた」
「チェンは経理財務担当なので、経理操作も万全で、小切手の偽装が発覚するまでに時間が掛かった」
「その間に、チェンは経営監査という目的で出張に出た」
「偽装小切手が発覚すると同時に、彼は出張先で行方不明になった」
「チェン部長は、どこへ出張に行ったんだ」
「東北方面へ行った」
「瀋陽の七夕レストランから報告を受けた後、チェンの足取りが消えた」
「チェンは、創業以来、わしと一緒にやって来た。真面目な男だ」
「そこで、おまえに依頼したいことがある」
「依頼するか、しないはミスター・ロン、あんたの自由だが、不案内な土地で、おれが役に立つのか」と、私は言った。
「おまえにしか頼めないことだ。おまえのマイペースでやってくれて結構だ」
「とりあえず、おれは何をすればよいのか」
「部長のチェンを見つけて欲しい」と言って、ミスター・ロンがワイングラスを空けた。

「じゃ、ガイド謙通訳を頼む」
「至急、秘書に言って探させるよ」
「ガイドが見つかり次第、おれは仕事に取り掛かるよ」
「よろしく、頼む」

3.

二日後、ミスター・ロンからおれのガイドが見つかったという知らせがあった。
ガイドは女性で、名前はリン。
彼女は、語学堪能で、地理には精通しているそうだ。
チェン部長の社内での評判は良く、人望も厚かった。
表面的には、金にも困っていなかった。
チェン部長は再婚で子供はなかったが、夫婦仲は良かった。
先ず、ミスター・ロンからもらったチェン部長の出張スケジュールを見直すことにした。
私は地理不案内なので、ガイドのリンが地図を出して、今回のチェン部長の出張スケジュールを丁寧に説明してくれた。
チェン部長は、瀋陽の七夕レストランで経営監査をした後、ＭＨＫを経由して、長春へ経営監査に行く予定だった。
去年、ＭＨＫに日式焼肉（３００人収容）レストランを開店した。集客は順調だった。
ＭＨＫは、瀋陽と長春の間にある人口６０万人の吉林省通化市に属する県クラスの都市だ。大型高級スーパーの出店も決定している。
地理的に、ＭＨＫは松遼平原と長白山地の中間に位置し、松花江の支流である大柳河と梅河が交差する地点にある肥沃な土地だ。
満鉄が、この周辺の鉄道を敷設したとき、ＭＨＫを中心拠点とした。
工業地帯ではないが、東北三省の主要穀倉地帯で、鉱産資源が豊富で主要なものに石炭、金、珪藻土、油頁岩、鉄、石英、石墨、ミネラルウオーターなど１７種類が知られている。

この地方で栽培されている秋田小町は、中国では上質の米の部類に入る。
ここで採れるトウモロコシは絶品だ。
それから、ＭＨＫの串カツ、串焼きは抜群だ。大連では味わえない。
しかし、吉林省のビールは不味い。
串カツ、串焼きがそのビールの不味さをカバーしてくれる。
以前一度だけ、私は友人の案内でＭＨＫを訪問したことがあった。
私は、暫らく瞑想した。そして、
「瀋陽からＭＨＫまで、鉄道利用で何時間掛かる」
「約４時間です」
「じゃ、バス利用で、どのくらいかかる」
「高速バスだと、３時間半ぐらいです」
「普通、出張で瀋陽からＭＨＫへ移動するには、鉄道か高速バスを利用するのか」
「そうです」と、リンが答えた。
私は、先ず、明日の朝、大連発の快速列車で「瀋陽七夕レストラン」に行くことにした。
リンに、明日の切符の手配をしてもらった。

4.

快速列車は早い。３時間で、瀋陽に着いた。
リンと、瀋陽駅前のマクドナルドで少し早い昼食を済ませた。
瀋陽駅は巨大な駅で、毛主席の時代を思いださせるようだ。
ガイドのリンに案内されて、タクシーに乗った。和平路で、私たちはタクシーを降りた。
「瀋陽七夕レストラン」というサインボードが目に入った。
レストランに入って、カン店長を呼んでもらった。
ミスター・ロンが、予め、カン店長に連絡を入れておいてくれたので、店長はすぐに出て来た。

名刺をカン店長に渡した。
「私の名前は、松浦ケント。チェン部長のことについて、少し話を聞かせて欲しい」と言った。
「チェン部長が、この店を出て行方不明になった日、何かおかしな素振りは見えなかったか」
「チェン部長は、いつものように、この店へ経営監査に来ただけだ。普段と変わったところは、別になかったですね」
「彼は、瀋陽から何処へ出張に行く予定だったのか」
「チェン部長は、去年オープンしたＭＨＫの日式焼肉レストランへ経営監査に行くと言っていました」
「彼は汽車に乗ったのか、高速バスに乗ったのか」
「分かりません。チェン部長は、その時の気分で乗り物を決めていたようです」
「切符も、チェン部長、自分で買っていました」
「瀋陽に、彼のよく行く飲み屋は無いのか」
「チェン部長は酒豪だと聞いていました。しかし、私は、瀋陽で、彼が酒を飲んでいるところを見たことがない」
「肉を納入している業者の話では、チェン部長が、ＭＨＫで飲んでいるところを見たらしいです」
「肉を納入している業者の名前と担当者、電話番号を教えて欲しい」
「すぐ調べます。ミスター・ロンからあなたに協力するように言われています」と言って、カン店長は部屋を出て行った。
５分ほどして、カン店長が紙切れを持って戻って来た。
紙切れに書かれている内容をして、私にその紙切れをくれた。
「名前は、瀋陽冷鮮食肉有限公司、住所は、和平人民路。連絡先が書いてあった」
「今から、この肉の納入業者のところへ行ってもよいかな」
「はい、確認しておきました。担当者は事務所で、あなたを待っていますよ」
「ありがとう、ミスター・ロンによろしく言ってくれ」と言って、

私と
リンは、「瀋陽七夕レストラン」を出て、タクシーに乗った。

5.

和平人民路でタクシーを降りた。
「瀋陽冷鮮食肉有限公司」と大きな看板が出ていたので、すぐに分かった。
玄関で、その担当者は私たちが来るのを待っていた。
たぶん、カン店長が連絡したのだろう。
「いらっしゃいませ、松浦ケント先生」と、彼が声を掛けて来た。
私は、カン店長がくれた紙切れを見ながら、
「チン主任ですか」
「そうです」
「お話を聞きたいのですが、チェン部長の件で」
「どうぞ、こちらへ」と言って、私たちを応接室に案内してくれた。
「あなたは、チェン部長と一緒によく飲みに行かれますか」
「部長とは、一度も、一緒に飲みに言ったことがありません」
「しかし、ＭＨＫで、チェン部長が飲んでいるところを見たことはあります」
「その時、彼は、独りで飲んでいましたか」
「二人で飲んでいました」
「なにか、黒い雰囲気が漂っていました」
「感じからして、チェン部長の知り合いのようでした」
「黒い雰囲気とは、黒社会のことですか」
「そうです」
「あなたの知っている人でしたか」
「いいえ、知らない人でした」
「ＭＨＫの飲み屋の名前を教えてもらえますか」
「東北二人世界という名のカラオケ倶楽部です」
「電話番号、住所は分かりません」

「倶楽部の名前が分かれば、それで結構」
「リン、今すぐＭＨＫへ行くことができるか」
「バスでしたら、３０分後にあります」
「じゃ、バスの手配を頼む、リン」
瀋陽からＭＨＫまで、バスで約３時間半。高速バスなのに自由乗降のバスのようによく途中停車した。

6.

それでも、夕方には、ＭＨＫに着いた。
先ず、私たちが泊まるホテルのそばの派出所へ挨拶に行った。
担当部署は、派出所の３階にあり、若い巡査部長が事務処理をしていた。
私は、名刺をその若い巡査部長に渡しながら、リンに通訳をしてもらって、彼に調査目的を簡潔に説明した。
「警察の仕事にだけは、手を出さないでくれ」
「それと、警察の仕事と関連がある時は、逐次、進行状況を報告してくれ、以上」と、その若い巡査部長が言った。
「了解、警察の仕事を見つけたときは、必ず、報告するよ」と言って、私たちはその巡査部長の部屋を出て、ホテルにもどった。
リンと夕食の打ち合わせをして、各々の部屋へ戻り、私は、シャワーを浴びて少し休憩して、待ち合わせ時間にロビーへ行った。
リンは、私より早くロビーに来て、色々尋ねてくれていた。
私たちは、火鍋（しゃぶしゃぶ）を食べに行った。
ＭＨＫの火鍋は、大連の火鍋に比べて量もたくさんあるし、値段もリーゾナブルで、二人とも満足した。
夕食後、リンに案内してもらって「東北二人世界」へ行った。
チェン部長の横に座って話をしていた小姐（服務員）を探すためだ。
チェン部長は、その倶楽部で有名人だった。
ミスター・ロンが私にくれたチェン部長の写真を出す必要は無か

った。
　チェン部長の横に座っていたのは、地元出身のトンという中肉中背で色白の小姐（服務員）だった。
　私は、彼女に紅包（チップ）を渡しながら、
「チェン部長は、いつも、誰と一緒に飲んでたの」
「キュウ先生と、いつも一緒に来てたわ」
「この店の飲み代は、誰が払っていたんだ」
「チェン部長がいつも払っていたわ」
「チェン部長は、若い頃、キュウ先生に凄く世話になったと言ってたわ」
「キュウ先生の職業は」
「この周辺の黒社会（暴力団）のボス（老板）よ」
「チェン部長は、ＭＨＫ出身か」
「そうよ。キュウ先生もＭＨＫ出身なの」
「チェン部長の実家の隣りの家が、キュウ先生の家らしいの」
「二人は、ここでどんな話をしていたんだ」
「新しい金鉱がどうのこうの、二人で話していたわ」
「チェン部長の実家は何処だ」
「愛民ビレッジ（村）よ」
「新しい金鉱の場所は分かるか」
「たぶん、愛民ビレッジの周辺よ」
「金鉱を掘るのに、予想以上にお金が掛かるので、資金繰りで揉めていたようだったわ」
「3ヶ月ほど前から、チェン部長は飲みに来ないわ」
「最近、キュウ先生は独りで飲みに来ていたわ」
「先週、キュウ先生は纏まった金が入ったと言って、マレーシアへ行っちゃったわ」
「それに、愛民ビレッジは景気が良いようで、来年の春に、愛民ビレッジの家の建て替えをするの」
「建て替えの資金繰りは、キュウ先生が面倒を見たそうよ」

「キュウ先生は、何時ごろ帰ってくるのだ」
「マレーシアのペナンに親戚がいるのよ。もう、戻って来ないわ」
「そうか、戻って来ないのか」
「リン、今夜でこの調査は打ち切りだ」
「明日の朝、バスで大連に帰る手配を頼むよ」
「大連行きのバスは、朝９時３０分発車です」

7.

明朝、私たちは、９時３０分発の高速バスに乗った。
１月初旬のＭＨＫの気温は零下１５～３０度で、田畑には、３０ｃｍほど雪が積もって、人っ子一人いなかった。
春にならないと田畑の雪は消えないし、農民は完全休業で誰も田畑に出ない。
午後４時３５分に、私たちは大連に着いた。
ミスター・ロンに報告をするために、私たちは、大連開発区の金帆ホテルに向かった。
ミスター・ロンは、金帆ホテル１階の「割烹七夕レストラン」の「椿の間」で、私たちを待っていた。
「お待たせしました」と、私が言った。
「疲れただろう」と、ミスター・ロンが言った。
「リンのおかげで、今回の仕事はスムーズに運びました」
「では、ミスター・ロン、今回の調査結果を報告します」
「しかし、この調査報告は、来年の春（旧正月）以降に、証拠が出て、その事実が明らかになるでしょう」
「今回の犯人は、ＭＨＫの気候風土に精通していました」
「そのＭＨＫの気候風土を巧妙に使っています」
「犯人は、初めから、この事件の結末が来年の春に出るようなプログラムにしたのです」
「貴社から振り出された小切手の使い方も、無駄の無い有効な使い方をしている。この結果も、来年の春には明らかになります」

私はミスター・ロンの顔を見ながら、言った。
「チェン部長は、新しい金鉱を探していました」
「そして、行方不明になった」
「ＭＨＫは、鉱物資源の豊かな土地だ」
「チェン部長は、ＭＨＫ出身だった」
「彼は、ＭＨＫについて詳しかった。だから、金鉱探しの話に乗ったということです」
「たぶん、ＭＨＫのことを知らない人なら、金鉱探しの話には乗らなかったでしょう」
「誰が、その金鉱探しの情報を提供したのだ」
「キュウ先生です」
「キュウ先生とは、どのような人物だ」
「キュウ先生は、チェン部長と同郷で、黒社会のボスとしてＭＨＫでは有名人なのです」
「チェン部長の家は貧しくて、キュウ先生の家の援助で大学に行くことができた」
「真面目なチェン部長は、そのことに恩誼を感じていた」
「チェン部長はどこにいるのだ」
「ＭＨＫです」
「彼は、元気なのか」
「いいえ」
「チェン部長が行方不明になった日、彼は瀋陽からＭＨＫまで高速バスに乗った」
「なぜなら、キュウ先生と会うために」
「もうひとつの目的は、新しい金鉱の場所を確認するためでした」
「チェン部長が乗った瀋陽からＭＨＫまでの高速バスとは名ばかりで、実質、自由乗降バスでした」
「その日、チェン部長は、愛民ビレッジの入り口で高速バスを降りた」
「彼が愛民ビレッジで降りたことは、私たちが瀋陽からＭＨＫに移

動した日、そのバスの運転手に確認した」
「幸運にも、そのバスの運転手は、チェン部長のことを覚えていた」
「ここからは、推測になりますが、来年の春には、私の報告が立証されます」
「愛民ビレッジの入り口には、キュウ先生の車がチェン部長を迎えに来ていた」
「その車で、キュウ先生はチェン部長を新しい金鉱予定地まで案内した」
「そこで、キュウ先生はチェン部長を殺害し、小切手を奪った」
「明くる日、ＭＨＫには雪が降り、３０センチほど雪が積もった」
「積もった雪が、チェン部長を隠したのだ」
「だから、チェン部長が再び顔を出すのは、来年の春になって雪が溶ける頃だ」

8.

「キュウ先生は、商売柄、金融機関には顔が利くので、小切手を容易に換金できた」
「換金した金をキュウ先生は、独り占めしなかった」
「キュウ先生は村長を呼んで、村の再開発（建て替え８８戸）を提案した」
「村長は、村民と相談して、キュウ先生の話を受け入れた」
「キュウ先生の再開発には、条件が一つあった」
「農閑期の間、村の住民に、田畑へ行くなという条件だった」
「村長は、キュウ先生の話を承諾した」
「キュウ先生は、愛民ビレッジの再開発の準備をして、マレーシアのペナンへ行ってしまった」
「しかし、愛民ビレッジの村民が約束を履行しなければ、村の再開発は中止だそうだ」
「キュウ先生は、新しい金鉱の話を知っていた村民との間に、村の再開発という名目でなにやら暗黙の了解を取っていたようだ」

「ミスター・ロン、報告は以上です」と、私が言った。
「よくやってくれた。ありがとう、ケント」
「それから、キュウ先生の件は、どうしますか？ミスター・ロン」
「私には、キュウ先生という知り合いはいない」
「振り出された小切手は、どう処理しますか」
「チェン部長が、振り出した小切手１０億円は、彼の退職金として処理する予定だ」
「チェン部長の件は、警察にも報告しますか」
「いや、彼の件は、おまえの報告通り、来年の春まで静観するよ」
「春になれば、チェン部長も、顔を出すだろう」　了

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0763v/

松浦ケントの大爆走　東京、大連、瀋陽、MHK

2011年7月22日03時39分発行